

教授就任にあたって



—ラジオ少年、長じてラジオ屋ならぬ ラジオロジ (Radiology) 屋—

顎顔面放射線学分野 林 孝文

平成14年11月1日付けで、新潟大学名誉教授・伊藤寿介先生（初代教授）の後任として、顎顔面再建学講座・顎顔面放射線学分野（旧歯科放射線学講座）の教授に就任いたしました、林 孝文（はやしたかふみ）と申します。どうぞ宜しくお願い申し上げます。私は本学歯学部を昭和62年（1987年）3月に卒業し、その後歯科放射線学講座に入局、助手として採用されました。以来15年余りの期間にわたり新潟大学にお世話になっております。

出身は、御柱祭で知られる、信州・長野県の諏訪で、「御神渡り」で有名な諏訪湖を眼下に望む土地で育ちました。厳冬期には、干したタオルがカチカチに固まって立つほどの冷気の中で生活し、全面結氷した諏訪湖でスケートの授業を受けた経験があります。「理屈っぽく自主独立型で、勝気で合理的、理想主義的だが独善的な匂いがする」と評される長野県の県民性を、長所も短所もさらに強調したような諏訪人の気質を、私もそのまま受け継いでいると自覚しています。

さて、放射線学は、医学・歯学を問わず、きわめてマイナーな分野と認識しています。いわゆる臨床系に属する分野ではありますが、歯科治療の上で独自性がある訳でもありませんし、極論すれば、歯医者としてはつぶしが利かないとも言えるでしょう（実際にはマルチな知識が必要となる重要な分野だと自負してはいますが）。なぜ私がこのような特殊な分野を積極的に選んだのかを、この機会に述べさせていただこうと思います。

放射線学は臨床物理学とも換言できる分野ではないかと思えます。私は小学生の頃からいわゆるラジオ少年でした。ハンダごてを振り回し、ゲルマニウムラジオやワイアレスマイクを作ったり、自分で設計した回路の動作検証をしたりしていました。最近、復刻版が販売されましたが、さまざまな電子回路を組み上げることができる、「電子ブロック」を親に買ってもらい、マニュアルにはない回路を考えて遊び尽くしたものです（また懲りずに復刻版を衝動買いしてしまいました）。小学生の頃の研究テーマは「光を使った音声通信」でした。光が当たると抵抗値が変化する硫化カドミウムセルを受光素子とし、電流変化を変換するのにトランスを利用した非常に簡単な回路で、音声の強弱を光量の強弱に変調した光から音声情報を取り出すことに成功し、夏休みの理科学研究で推薦を受けたのですが、クラスの説明会で担任の先生が「理解不能」とおっしゃられたのを覚えています。この研究はさらに中学・高校と継続し、最終的には、送信側は発光ダイオード、受信側はフォトトランジスタを利用して応答性を向上させ、音質を著しく改善できました。また、受光部を天体望遠鏡の接眼部に装着し、遙か遠方のネオンサインなどの照明がさまざまな変調のされ方をしており（電源である交流の周波数ですが）、それぞれ独特の音質をもたらすことが興味深かったものです（ちょっと変ですね、今考えると）。

高校の時には無線部と物理部とを掛け持ちしていました。ラジオ少年としては、中学3年生の時

に取得したアマチュア無線技士の免許を生かすため無線部に入るのは自然のなりゆきですが、物理部ではさらに音響工学に興味を持ち、シンセサイザーの製作に携わっていました。手持ちのラジカセを総動員して、多重録音をして自作の音楽を創ったりしていましたが、自由に使うことができたオシロスコープで、音の高さ（周波数）や大きさ（振幅）の意味や、音質と波形との関係（正弦波の音、矩形派の音など）を確かめるのが楽しかったように記憶しています。一方、無線部では限られた予算、限られた無線機器でどれだけ遠方まで交信できるか、アンテナのマッチングと格闘していました。また、中古の無線機を改造したり、周波数を直読できないダイヤルを、高調波を利用して目盛りをふったりした苦勞もありました。いずれにしても、電磁波や音波の物理学的特性に関する身体的経験が日常であったわけです。

大学では、一転して映像に興味を持つようになり、アニメーションの制作に参加する一方で、歯学部の写真部に所属し、自身でモノクロの写真を撮影し、現像したり印画紙に焼き付けたりするこ

とも始めました。特に、煩雑な背景を整理して、被写体のある一部だけを逆光を利用するなどして強調し、見えない全体像を見る者に想像させるような写真表現には強く惹かれました。レンズは超広角17mmから超望遠500mmまで揃えましたが、中望遠と呼ばれる、焦点距離85～90mm程度のレンズが最も自分に合った画角のように感じています。特に90mmのマクロレンズは最も気に入っており、20年以上使い続けています。（表紙写真を御覧下さい）

このような経緯を有する人間が進むべき道は、自ずと決まってくるように思えます。電磁波や音波、そして映像が身近にあった者が、特段の努力をせずとも、それまでの知識や経験を応用して楽に仕事に結びつけることが出来るとすれば？ 放射線学分野（＝ラジオロジ屋？）にラジオ少年上がりが多いのは、決して偶然ではないと思います。ただ、これも私の独善的な思い込みかも知れませんが。

（本文は、新潟大学歯学部同窓会誌第23号に掲載された内容とほぼ同一です）

